

七月十六日

朝から暑い。今日は幾つかの雑事をこなさなくてはならない。暑さ負けているヒマはない。

十一時丸の内、雑事。十四時了。十四時半汐留、YOKOTA 画廊。山口勝弘展、一九五〇年代、見る。

七月十七日

只今十時三〇分頃新幹線のぞみで岡山に向かっている。新神戸を過ぎた辺りで、間もなく岡山だろう。

昨日見た山口勝弘のヴェトリリー又はやはり良かった。半世紀前にあのような試みがなされていたのを知るのは少々驚きでもある。ガラスの透明性と同時に在る物質感、そして見る者の動きと反応する運動性（変容性）がすでに的確に表現されていた。今のガラス建築の流行は山口のヴェトリリーと比較すれば、ガラスのステレオ・タイプな俗性が表現されているに過ぎない。山口の存在は確かに「前衛」であったのを、失礼な言い方になるが、初めて理解できた。展示会の場所も良かった。汐留の倉庫の中のギャラリィで、展示は小じんまりとしたものであったが、それも又的が絞られていて良かった。ヴェトリリーの一点だけでもOKだったんじゃないか。カタログに山口が記していた。「新しい表現方法の開拓と古い表現を批判的に継承し表現領域の総合を行うこと」の精神を貫くことが、未だに私の中に生きております」の言は誠

に山口勝弘の現在を言い抜いていると思う。私は真の芸術家と出会っていたのだ、という事を実感する。

岡山、倉敷、笠岡を廻り雑事をこなす。十八時三〇分頃、最終地は京都先斗町です。会食を二〇時半迄。只今二十二時のぞみ最終便で東京に向けて走っている。色々と考えさせられて良い一日であった。

今朝の新幹線のぞみ車中で、つづけている銅版画シリーズの展開をいくつかスケッチした。しかし、本当にこんな事やっていて良いのかという疑問も又大きく育つてきている。要するに中途半端はもう許されない、そんな時間も残されてはいない、という不安は大きい。建築設計に対する考えを明瞭にする為の、銅版画製作であるのなら、そんなモノはする必要がない。建築設計ではどうしてもやり切れぬ、限界があると考えを突きつめたところから始めるのならば、その作業には意味がある。要するに銅版画製作が単なる気まぐれでなければ良いのだけだ。

七月十八日 日曜日

終日、考え、作業をすすめた。夜、流石に疲れて赤ワインを少し計り。これ位の慰労は良いだろう。

七月十九日

海の日とやらで何なんだ海の日というのは、だが休日

広島の本本君とのささやかな共同作業ほんの少し計りすむ。終日、考え、手を動かす。夜、流石に少々疲れてバロー口を少々考えないのが休息であろうと思われるが、目覚めていれば考えるからナア。

銅版画の充実と、空白との併存について直観するに、たかが芸

術は謂はゆる世間様と無関係であり得るが、ベンヤミンを引くまでもなく、最良の芸術は他者、すなわち世間そのものでもある。私の銅版画は、多分私が現実世界で作っている建築よりも、はるかに良い。何故ならリアライズされ得ぬモノを彫っているから。しかし、花田清輝の「洛中洛外図」の論評を超えるものになっているか、どうか、大いに不安である。現代とは言わぬが、今の特質というのは知的把握力が、無意識界を陵辱し尽くしている現実があるからネ。そこらの非都市計画的路地をさまよっている、老人や婆さんの気持「記憶を考慮の対象とし得ぬ計画など、情報化時代の計画とは言えぬ、という、それだけの直観はあるのだが……。